

令和4年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第5号（9月予報）

令和4年8月30日 秋田県病害虫防除所

<p>【内容】</p> <p>I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明</p>	<p>【問合せ先】</p> <p>秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251</p>
<p>【お知らせ】</p> <p>◇今回の予報対象期間は9月を主とします。次回の発表は令和4年9月27日の予定です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のウェブサイトでご覧いただけます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のウェブサイトでご確認ください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関にご相談ください。最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」でご確認ください。 https://pesticide.maff.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトでご登録いただけます。 https://www.e-komachi.jp/</p>	

I. 予報の要点

水 稲	<p>斑点米カメムシ類の発生量はアカスジカスミカメがやや多い、アカヒゲホソミドリカスミカメが多いと予想されます。8月23日発表の防除対策情報第9号を参照し、防除対策を実施してください。</p>
大 豆	<p>マメシクイガの発生量は平年並と予想されます。連作により密度が高まり被害が増大しますので、連作ほ場では、9月上旬の防除（1～2回）を徹底してください。また、吸実性カメムシ類の発生が多いほ場ではカメムシ類にも効果のある薬剤を選択してください。</p> <p>食葉性鱗翅目幼虫の発生量は多いと予想されます。若齢期での防除を徹底してください。</p>
野 菜	<p>病害では、トマトの灰色かび病の発生量が多い、ねぎ（秋冬どり）のさび病、黒斑病・葉枯病の発生量がやや多いと予想されます。予防散布に努め、発病を確認したら治療効果のある薬剤を散布してください。</p> <p>害虫では、キャベツ（秋冬どり）のヨトウガの発生量が多い、ハスモンヨトウの発生量がやや多いと予報されます。野菜・花きではオオタバコガの発生量が多いと予想されます。いずれも若齢幼虫のうちに防除してください。</p>
果 樹	<p>りんごとなしでは、ナミハダニの発生量が多いと予想されます。発生が多い園地では、9月中旬までに薬剤防除してください。同様にりんごとなしでは、果樹カメムシ類の発生量がやや多いと予想されます。園内への飛来が多い場合は、ネオニコチノイド剤で防除してください。</p> <p>ぶどうでは、べと病の発生量がやや多いと予想されます。発生が多い園地では銅剤を散布してください。</p>

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期	発生量	
				現況	予報
水 稲	斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)	全県	—	平年並	やや多い
	(アカヒゲホソミドリカスミカメ)			多い	多い
大 豆	フタスジヒメハムシ	全県	—	やや少ない	平年並
	マメシンクイガ	全県	—	平年並	平年並
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	多い	多い
ね ぎ (秋冬どり)	さび病	全県	—	平年並	やや多い
	黒斑病・葉枯病	全県	—	平年並	やや多い
	ネギアザミウマ	全県	—	やや少ない	平年並
	ネギハモグリバエ	全県	—	やや少ない	平年並
	シロイチモジヨトウ	全県	—	(前年より多い)	(前年より多い)
きゅうり	褐斑病	全県	—	平年並	平年並
	黒星病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	炭疽病	全県	—	平年並	平年並
キャベツ (秋冬どり)	コナガ	全県	—	平年並	平年並
	モンシロチョウ	全県	—	やや少ない	平年並
	ヨトウガ(第2世代)	全県	—	多い	多い
	ハスモンヨトウ	全県	—	平年並	やや多い
トマト	葉かび病	全県	—	少ない	やや少ない
	灰色かび病	全県	—	多い	多い
	コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	全県	—	平年並	やや多い
野菜・花き 共通	オオタバコガ	全県	—	多い	多い
りんご	斑点落葉病	全県	—	少ない	平年並
	炭疽病	全県	—	やや少ない	平年並
	輪紋病	全県	やや早い	平年並	やや多い
	褐斑病	全県	—	多い	多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部	—	平年並	やや少ない
		県中央部・県南部	—	やや少ない	平年並

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期	発生量	
				現況	予報
りんご	ナミハダニ	全県	—	やや多い	多い
	リンゴハダニ	全県	—	多い	多い
	果樹カメムシ類	全県	—	平年並	やや多い
なし (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	黒斑病	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	輪紋病	県北部・県中央部	やや早い	平年並	やや多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	やや多い	多い
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	果樹カメムシ類	県北部・県中央部	—	やや多い	やや多い
ぶどう	べと病	県南部	—	平年並	やや多い
	晩腐病	県南部	—	平年並	平年並

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稲

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	— —	やや多い (前年並) 多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、8月4半旬の抽出ほ場調査における水田内でのアカスジカスミカメのすくい取り数は0.9頭 (平年1.1頭) でやや少なく、発生地点率は25.0% (平年23.4%) で平年並だった (/±)。また、アカヒゲホソミドリカスミカメのすくい取り数は0.5頭 (平年0.2頭) で多く、発生地点率は11.3% (平年6.7%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、8月23日発表の防除対策情報第9号を参照して防除する。

B 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. フタスジヒメハムシ	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、8月5半旬の巡回調査における株当たり成虫数は0頭 (平年0.1頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発ほ場ではアグロスリン乳剤などで防除する。

イ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. マメシンクイガ	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、8月5半旬の巡回調査における成虫の叩き出し数は0.8頭 (平年1.1頭) 、発生地点率は31.3% (平年26.1%) でいずれも平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、連作により密度が高まり被害が増大するので、連作ほ場では防除を徹底する。

イ、薬剤は次のいずれかで散布する。

- ① アグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤は9月上旬までに1回散布する。
- ② エルサン乳剤、グレーシア乳剤、スミチオン乳剤、トレボン剤 (粉剤DL、乳剤、EW)、プレバソフフロアブル5は9月上旬に1～2回散布する。なお、前年多発したほ場では2回散布とする。

- ③ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤、トレボンスカイMC、プレバソンフロアブル5を9月上旬に2回散布する。
- ④ エルサン乳剤、トレボン剤、プレバソンフロアブル5は成分の総使用回数に注意する。
- ⑤ ホソヘリカメムシなどの吸実性カメムシ類の発生が多い場合は、カメムシ類にも効果のある薬剤を選択する。

ウ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 食葉性鱗翅目幼虫	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。
- イ、8月5半旬の巡回調査における株当たり頭数は0.2頭（平年0.1頭）で多い、発生株率は13.4%（平年7.0%）で高い、葉の食害度は31.1（平年23.4）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ツメクサガは葉だけでなく莢も食害するため、エルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを莢によく付着するように散布する。
- イ、老齢期になると薬剤の効果が劣るので、若齢期に防除する。

C ねぎ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. さび病	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、8月4～5半旬の巡回調査における発病株率は2.6%（平年2.2%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、夏どりねぎの被害残さは、ほ場外で処分する。
- イ、発病が多くなってからでは防除効果が劣るので、発病初期からアミスター20フロアブル（RACコード：11）、オンリーワンフロアブル（RACコード：3）、カナメフロアブル（RACコード：7）などを散布する。ただし、アミスター20フロアブルは、近接散布するとねぎを湾曲させる場合があるので、散布間隔を2週間以上とする。
- ウ、耐性菌の出現を回避するため、RACコードが3、7、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病・葉枯病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、8月4～5半旬の巡回調査における発病株率は8.0%（平年6.3%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、適正な肥培管理を行う。

イ、本県における秋季の発生は、葉枯病が主である。葉枯病が原因の黄色斑紋病斑は、収穫物の品質低下につながるので、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ダコニール1000（RACコード：M5）、テーク水和剤（RACコード：3・M3）、パレード20フロアブル（RACコード：7）を組み合わせ、9月前半～10月前半に約10日間隔で散布する。ただし、アミスター20フロアブルは、近接散布するとねぎを湾曲させる場合があるので、散布間隔を2週間以上とする。

ウ、耐性菌の出現を回避するため、同じRACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. アザミウマ類（ネギアザミウマ）	－	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、8月4～5半旬の巡回調査における食害株率は17.0%（平年35.5%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤（RACコード：4A）、グレーシア乳剤（RACコード：30）、ダントツ水溶剤（RACコード：4A）、ディアナSC（RACコード：5）、ファインセーブフロアブル（RACコード：34）、ベネビアOD（RACコード：28）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（RACコード：4A）、プリロッソ粒剤（RACコード：28）、ミネクトデュオ粒剤（RACコード：28・4A）を株元散布する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、同じRACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ネギハモグリバエ	－	平年並（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、8月4～5半旬の巡回調査における食害株率は9.0%（平年19.7%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から防除する。アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、グレーシア乳剤（RACコード：30）、ダントツ水溶剤（RACコード：4A）、ディアナSC（RACコード：5）、ファインセーブフロアブル（RACコード：34）、ベネビアOD（RACコード：28）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（RACコード：4A）、プリロッソ粒剤（RACコード：28）、ミネクトデュオ粒剤（RACコード：28・4A）を株元散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統（バイオタイプB）の発生が確認されているほ場では、防除を徹底する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、同じRACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. シロイチモジヨトウ	—	— (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、8月4～5半旬の巡回調査における食害株率は1.4%（前年0%）で前年より高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、幼虫が作物内に食入したり、幼虫の齢期が進むにつれ防除効果が劣るので、発生初期（若齢期）にアグロスリン乳剤（RACコード：3A）、カスケード乳剤（RACコード：15）、ゼンターリ顆粒水和剤（RACコード：11A）、ノーモルト乳剤（RACコード：15）などを茎葉散布する。その際は、収穫前日数に注意する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、同じRACコードの薬剤は連用しない。

D きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 褐斑病	—	平年並（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、8月4～5半旬の巡回調査における発病株率は9.3%（平年21.0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、発病後の防除は効果が劣るので、発病前からシトラノフロアブル（RACコード：M1・M5）、ジマンダイセン水和剤（RACコード：M3）、セイビアーフロアブル20（RACコード：12）、ダコニール1000（RACコード：M5）などの予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤（RACコード：10・2）など治療効果のある薬剤を散布する。

ウ、ベンゾイミダゾール系剤（RACコード：1）、SDHI剤（RACコード：7）、QoI剤（RACコード：11）では耐性菌が確認されているので使用しない。

エ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

オ、翌年への伝染源を減らすため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、支柱などの各種農業資材はケミクロンGなどで消毒する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒星病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、8月4～5半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年1.8%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、冷涼多湿条件で発病が多くなるので、山間高冷地では予防散布に努める。

イ、発病前から定期的にベフドー水和剤（RACコード：M7・M1）、ジマンダイセン水和剤

(RACコード:M3)、ダコニール1000(RACコード:M5)などを散布する。発病を確認した場合は発病部位を取り除き、速やかにスコア顆粒水和剤(RACコード:3)、トップジンM水和剤(RACコード:1)などを散布する。

ウ、翌年への伝染源を減らすため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、支柱などの各種農業資材はケミクロンGなどで消毒する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 炭疽病	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている(/±)。

イ、8月4～5半旬の巡回調査における発病株率は11.5%(平年13.0%)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病部位は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

イ、予防散布に努めるとともに、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ゲッター水和剤(RACコード:10・1)など、治療効果のある薬剤を散布する。ただし、薬害防止のため、アミスター20フロアブルには浸透性を高める展着剤を加用しない。

ウ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

エ、耐性菌の出現を回避するため同じRACコードの薬剤は連用しない。

オ、翌年への伝染源を減らすため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、支柱などの各種農業資材はケミクロンG等で消毒する。

E キャベツ (秋冬どり)

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. コナガ	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている(/+)。

イ、秋田市予察ほにおける8月1～4半旬のフェロモントラップの誘殺数は3頭(平年6.1頭)でやや少なかった(/-)。

ウ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.1頭(平年0.1頭)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生初期で幼虫の密度が低い場合は、遅効性で残効の長い昆虫成長制御剤(IGR剤)又はBT剤を散布する。

イ、発生が多い場合は、アフーム乳剤(RACコード:6)、グレーシア乳剤(RACコード:30)、コテツフロアブル(RACコード:13)、スピノエース顆粒水和剤(RACコード:5)、ディアナSC(RACコード:5)、トルネードエースDF(RACコード:22A)、フェニックス顆粒水和剤(RACコード:28)、プレバソンフロアブル5(RACコード:28)などを散布する。なお、フェニックス顆粒水和剤及びプレバソンフロアブル5は2週間程度の残効があるので、防除回数を減らすことができる。

ウ、薬剤感受性の低下を回避するため、同じRACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. モンシロチョウ	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭 (平年0.0頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除が可能である。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ヨトウガ (第2世代)	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、秋田市予察ほにおける8月1～4半旬のフェロモントラップ誘殺数は1頭 (平年0.5頭) で平年並だった (/±)。

ウ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.2頭 (平年0.0頭) で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除が可能である。

イ、老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫のうちに防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ハスモンヨトウ	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭 (平年0頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除が可能である。

イ、老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫のうちに防除する。

5. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
黒腐病	—	平年並	平年並	防除を要するほ場は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 (モアガアブラムシ)	—	やや少ない	やや少ない	防除を要するほ場は少ないと見込まれる。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 葉かび病	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病株率は12.9%（平年32.6%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、過度のかん水を避け、ハウス内の換気に努める。

イ、肥料切れを避ける。

ウ、発病前からゲッター水和剤（RACコード：1・10）、ダコニール1000（RACコード：M5）、ベルコート水和剤（RACコード：M7）などで予防散布に努める。発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、トリフミン水和剤（RACコード：3）などの治療効果のある薬剤を葉裏にもかかるように散布する。

エ、耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 灰色かび病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病株率は34.6%（平年7.5%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、8月30日発表の防除対策情報第10号を参照して防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. コナジラミ類 （オンシツコナジラミ）	—	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発生株率は0%（平年0.1%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハウス内外の除草に努める。

イ、摘葉後は、残さを早期に処分する。

ウ、多発すると防除効果が低下するので、発生初期からアディオン乳剤（RACコード：3A）、ベストガード水溶剤（RACコード：4A）、ノーモルト乳剤（RACコード：15）、モスピラン顆粒水溶剤（RACコード：4A）などを散布する。

G 野菜・花き共通

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. オオタバコガ	－	多い（－）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）

イ、防除適期決定ほ（3地点）における8月1半旬～3半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は76頭（平年12.6頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害痕を発見したら、幼虫が近くに潜んでいるので、注意深く観察し、捕殺する。

イ、初期被害を早期に発見し、若齢幼虫期に防除する。

H りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 斑点落葉病	－	平年並（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病葉率は1.4%（平年2.8%）、発病地点率は72.7%（平年88.2%）でいずれも低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

イ、9月中旬以降に高温・多雨の多発条件が予想される場合は、9月中旬頃に薬剤を散布する。

ウ、QoI剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 炭疽病	－	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0.0%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、日焼け果は発病しやすいので、摘果する。

イ、被害果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

ウ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

エ、9月中旬以降に降雨が続くと予想される場合は、9月中旬頃に薬剤を散布する。

オ、QoI剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 輪紋病	やや早い (－)	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (－/+)。

イ、主な感染期間である6月の降水量は平年と比べて多く、7月の降水量は平年と比べてかなり少なかったことから、感染量は平年並だったと推定される (/±)。

ウ、8月中旬の巡回調査における発病果率は0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

ウ、Q o I 剤 (R A Cコード: 11) は耐性菌の出現を回避するため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 褐斑病	－	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢率は0.2% (平年0.0%)、発病地点率は13.6% (平年0.5%) でいずれも高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

イ、現在、葉での発病が確認され、かつ9月中旬以降に降雨が続くと予想される場合は、9月中旬頃に薬剤を散布する。

ウ、Q o I 剤 (R A Cコード: 11) は耐性菌の出現を回避するため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	－	県北部 やや少ない (前年並) 県中央部・県南部 平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、県北部では、防除適期決定ほ(2地点)における8月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は46頭(平年122頭)で少なく(/－)、8月中旬の巡回調査における被害果率は0% (平年0.0%) で平年並だった(/±)。

イ、県南部では、防除適期決定ほ(5地点)における8月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は398頭(平年218頭)でやや多く(/+)、8月中旬の巡回調査における被害果率は0% (平年0.1%) でやや低かった(/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は速やかに摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫の飛来が多く、夜温が産卵条件(20～22時の気温が18℃以上)を満たす日が続く場合は、ネオニコチノイド剤などで防除する。その際は、収穫前日数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. ナミハダニ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たりの成幼虫数は4.0頭（平年1.3頭）で多く、発生地点率は77.3%（平年47.2%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では、9月中旬までに薬剤防除する。その際は、収穫前日数に注意する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつRACコードの数字が同一の剤は年1回の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. リンゴハダニ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たりの成幼虫数は0.1頭（平年0.0頭）で多く、発生地点率は36.4%（平年7.0%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつRACコードの数字が同一の剤は年1回の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、防除適期決定ほ（7地点）における8月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の総誘殺数は25頭（平年75頭）で平年並だった（ /±）。

ウ、8月中旬の巡回調査における被害果率は0.1%（平年0.1%）で平年並、被害地点率は9.1%（平年15.0%）でやや低かった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況を良く観察する。新成虫の加害は、山間部や林地に隣接する園地で多いので特に注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、ネオニコチノイド剤で防除する。

ウ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

I なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、8月上旬の降水量は多く、8月中旬の降水量はかなり多かったことから、果実に対する感染量は多かったと推定される（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は0.1%（平年0.2%）、発病果率は0.4%（平年1.0%）でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病部位は直ちに切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は8.1%（平年16.2%）、発病果率は0%（平年0.2%）でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、徒長枝及び発病が見られる枝は切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 輪紋病	やや早い（-）	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（-/+）。

イ、主な感染期間である6月の降水量は平年と比べて多く、7月の降水量は平年と比べてかなり少なかったことから、感染量は平年並だったと推定される（ /±）。

ウ、8月中旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、防除適期決定ほ（4地点）における、8月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は、354頭（平年326.9頭）で平年並だった（ /±）。

ウ、8月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0.01%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は見つけ次第直ちに摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫の飛来が多く、夜温が産卵条件（20～22時の気温が18℃以上）を満たす日が続く場合は、ネオニコチノイド剤などで防除する。その際は、収穫前日数に注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5. ナミハダニ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たり成幼虫数は0.2頭（平年0.1頭）でやや多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では、9月中旬までに薬剤防除する。その際は、収穫前日数に注意する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつRACコードの数字が同一の剤は年1回の使用とする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
6. リンゴハダニ	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たり成幼虫数は0.001頭（平年0.002頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつRACコードの数字が同一の剤は年1回の使用とする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
7. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、防除適期決定ほ（4地点）における、8月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへのカメムシ類の総誘殺数は、3頭（平年21頭）でやや少なかった（ /-）。

ウ、8月中旬の巡回調査における被害果率は0.1%（平年0.0%）、被害地点率は20.0%（平年9.0%）でいずれもやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は園地によって異なるので、飛来状況をよく観察する。新成虫の加害は、山間部や林地に隣接する園地で多いので特に注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、ネオニコチノイド剤を散布する。

J ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ベと病	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ、8月中旬の巡回調査における巨峰の発病葉率は0% (平年0.5%)、発病果房率は0% (平年0%) でいずれも平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、欧州系品種の他、巨峰などの大粒種、スチューベンで発生が多くなりやすい。

イ、発生の多い園地では、銅剤を散布する。ただし、ムッシュボルドーDF、Zボルドー及びコサイド3000は、薬害 (落葉) のおそれがあるので、クレフノン100倍を加用する。

ウ、翌年の伝染源となる落葉は、土中に埋めるなど適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 晩腐病	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、8月中旬の巡回調査における巨峰の発病果房率は0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した果粒は摘み取り、適切に処分する。

イ、翌年の伝染源となる巻きひげや枝に残っている穂梗の基部は切除後、土中に埋めるなど適切に処分する。

IV. 気象予報

令和4年8月25日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（8月27日～9月26日）

(1) 予報のポイント

暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。期間の前半は気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ない見込みです。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

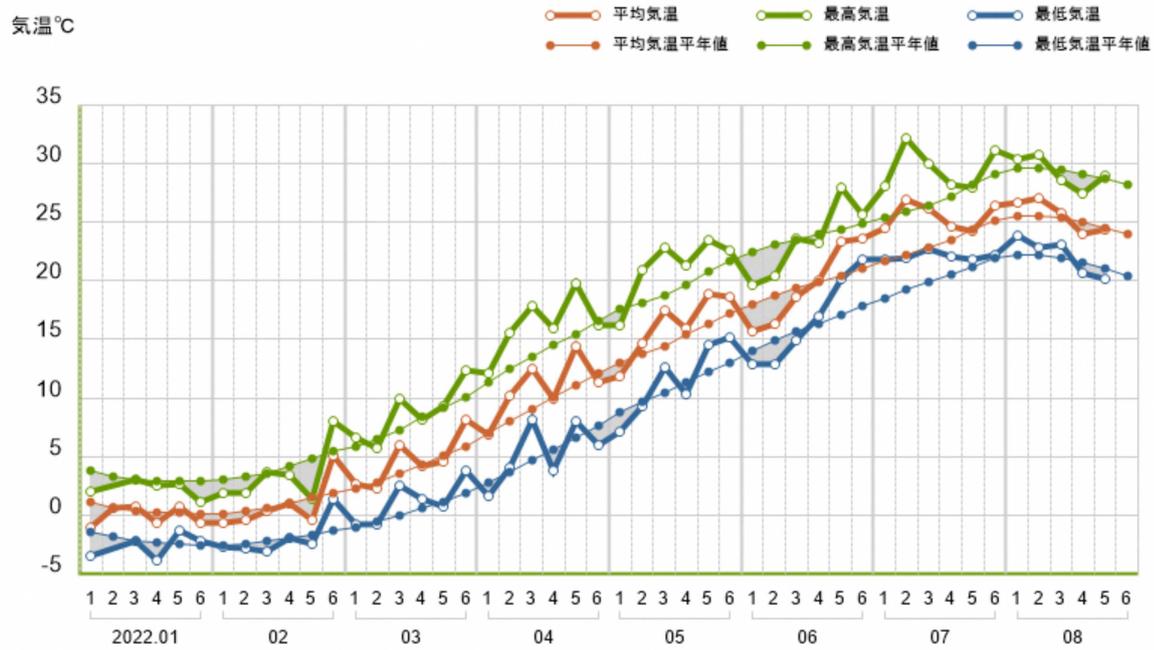
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20%	40%	40%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	40%	20%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

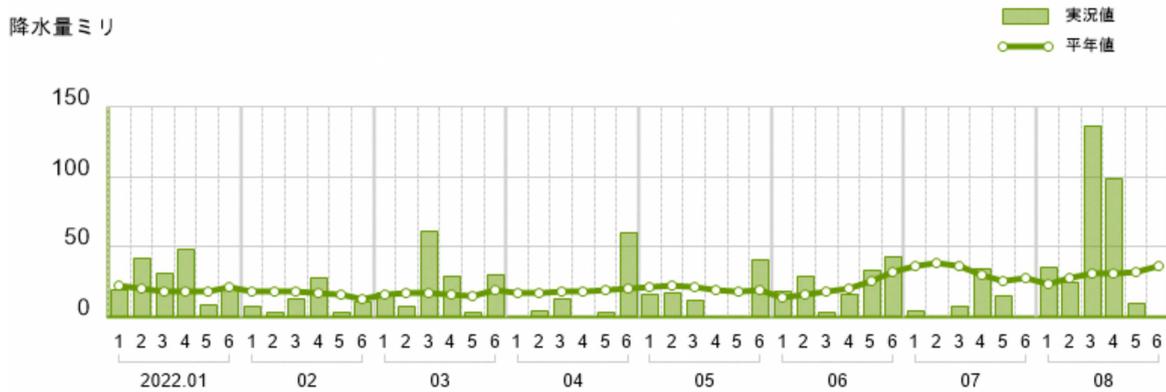
	低い	平年並	高い
8/27～9/2（1週目）	30%	50%	20%
9/3～9（2週目）	30%	50%	20%
9/10～23（3～4週目）	20%	30%	50%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～8月5半旬 秋田県農業気象システムより)

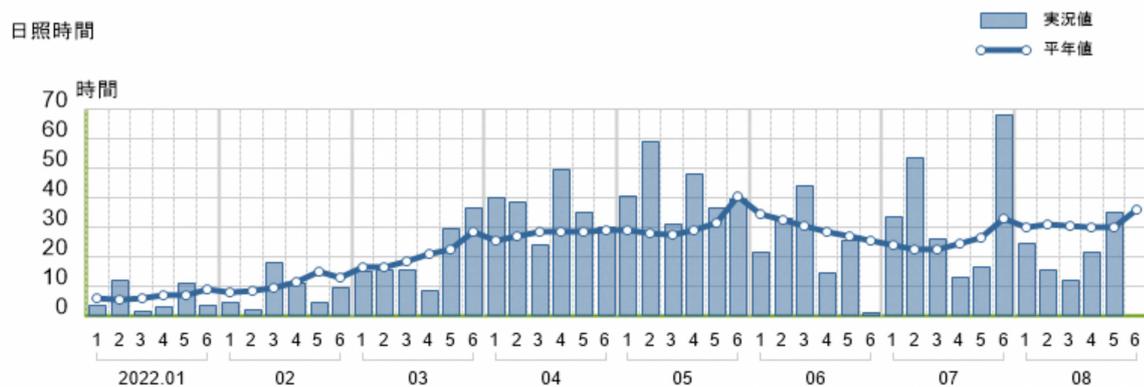
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感じることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分な注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
 - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
 - ・ 病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
 - ・ 防除履歴を必ず記録する。

- 農薬使用上の注意
 - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させないようにする。
 - ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に確実に周知する。
 - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
 - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
 - ・ 農薬散布作業にあたっては、装備と体調を万全にする。

- 農薬取扱い上の注意
 - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
 - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移し替えない。